

日比嘉高先生 (名古屋大学文学研究科准教授)

日本語の〈外〉で書く—非母語話者の現代日本語文学

記録 川野 里紗
校閲 川口 隆行

はじめに

二〇一〇年六月五日(土)、第三回国語教育カフェにおいて、日比嘉高先生(名古屋大学文学研究科准教授)にご講演いただいた。

日比先生は、現在、次のテーマを中心に研究を進められている。一つは、モデル小説のトラブル史であり、もう一つは、移民文学とその出版文化についてである。今回のご講演は後者に関するもので、非母語話者の現代日本語文学について、現代の様々な社会的・文化的な問題と関連させながらお話しいただいた。「母語」や「翻訳」をキーワードにした具体的な作品の分析を交えながらのご講演は、参加者がそれぞれ考察を深めながらうかがうことのできるものであり、大変刺激的なものであった。また、文学という領域をこえて、自分自身の生活や、教育の現場の問題との関係のなかで、日本語文学とは何か、日本語とは、ことばとは何か、ということについて、考えさせられるものであった。

以下、ご講演の要旨である。

講演要旨

近年、日本語を母語としない作家・詩人や、彼らによる日本語の文学作品が注目を浴びている。これらの作品は、日本語の小説・詩として表面的に読まれてしまいがちであるが、そのような単純な読みだけでは、これらの作品が提示する問題や可能性を見落とすことになるのではないか。では、非母語話者による日本語文学を読み解くことで、一体どのような問題を引きだし、何を考えることができるだろうか。「母語の〈外〉」と「翻訳」といったキーワードを分析の観点としながら明らかにしていく。

●母語の〈外〉へ出るということ

母語というと、「私」と一体で、引きはがすことのできないもの、といったイメージがある。実際に、どんな言語を新しく学ぶにしても、まずは母語を手掛かりとしなくてはならないし、また、どれほどその言語に堪能になったとしても、母語を手放すことはできない。母語はついてまわるのである。

中国出身の詩人である、田原の作品に描かれるのも、そのような母語の姿である。H氏賞を受賞した『石の記憶』(二〇〇九年十月二十五日、思潮社)所収の「亡命者」における「母語は死ぬまで続く」という結びのことばには、母語である中国語に対する想い、その中国語ではなく日本語で詩を書き続ける詩人の複雑な思いや覚悟を垣間見ることができる。しかし、そもそも母語は生まれた時から身につけているものではない。それは、生まれ成長する過程の中で後天的に身につけていく、社会的なものである。よって人は母語の〈外〉に飛び出し、また別の誰かの母語に飛び込むことが可能なのである。それは決して母語から完全に自由になる、というわけではないが、疑いようのない自明なものとしてあった母語を見つめ直すこととなる。田原は次のようにも述べている。

「日本語で創作していくうちに、日本語という、私にとって母語以外の言語を通じて、創作の「自己革命」と「換骨奪胎」をはかっていることに気づくようになった。」それは、日本語を学び、日本語で表現することによって、確固たるものとして持っていた母語や母語の文化が捉え直され、変容していく、ということに他ならない。

(田原『そうして岸が誕生した』二〇〇四年十月、思潮社)

また、多和田葉子は「エクソフォニー」という言葉で「母語の〈外〉へ出る」ことの意味について語っている。「エクソフォニー」とは母語の外に出た状態一般を指すことばである。多和田は「エクソフォン文学」について次のように述べている。

これは「外国人文学」とか「移民文学」などという発想と似ているようで、実は正反対かもしれない。「外から人が入ってきて自分たちの言葉を使って書いている」という受けとめ方が「外国人文学」や「移民文学」という言い方に表れているとしたら、「自分を包んでいる(縛っている)母語の外にどうやって出るか?出たらどうなるか?」という創作の場からの好奇心に溢れた冒険的な発想が「エクソフォン文学」だとわたしは解釈した。

(多和田葉子『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』二〇〇三年八月、岩波書店)

つまり、「移民文学」と「外国人文学」という言い方そのものに、自らは決して母語の外に立たずに、母語やそれを話す均質な「自分たち」と、そうでない異質なことば・人とのはっきりとした線引きをそのまま保持しようとする態度が表れている、ということである。そこでは母語の「顴骨脱退」や「自己革命」の意識はみられない。それに対して、「エクソフォン」や「エクソフォニー」ということばに多和田が見出すのは、母語から出て行くことで生まれる新しい文学の可能性であり、それによってなされる、線引き・図式そのものの変化、ということになるだろう。

母語の〈外〉にでることとは、すなわち、均質な〈内〉と異質な〈外〉の間の境界線を越えることで、双方を変質させ、図式そのものをも切り崩していくことであるといえるのである。

●翻訳という行為

母語の〈外〉に出る、とはどういうことかについて考えてきた。本項目では、母語とそうではない言葉がどのように関係を切り結んでいるかについて翻訳という行為に着目し考えていく。

酒井直樹は、翻訳という行為に関して次のように述べている。

異言語的な聞き手への語りかけでは、受信あるいは受容の行為は翻訳の行為として生起し、翻訳はすべての聞き取りあるいは読み取りにおいておこることが分ってくる。均質言語的な聞き手への語りかけの構えの場合、翻訳は均質な媒体の内部とその外側の間で起こるのに対し、異質な聞き手への語りかけの構えでは、聞き手が話し手に呼応するときなら何時でも、原則として、翻訳が起こるといふ立場が採られるのだ。

(酒井直樹『日本思想という問題』一九九七年三月、岩波書店)

異言語的な聞き手への語りかけの構えでは、話を通じない、コミュニケーションには齟齬が生じる、という前提で対話がなされるため、常に翻訳という行為が生じるのに対し、均質言語的な聞き手への語りかけの構えでは、翻訳は、均質な「自分たち」の中に異質な〈外〉から新しい情報を取り入れる際に行う変換という程度にしか現れない。しかし、実際は「自分たち」という〈内〉が完全に均質だとはいえないはずだ。だからこそ、翻訳はいたるところで発生するものとして捉えたほうが妥当であ

る、と酒井は述べているのである。

また酒井は、翻訳とは、二つの言語を橋渡しする仲介業のようなものではなく、翻訳することを通して、双方を交差させるようなものであり、結び合わせながら両方を既定しあってしまうような、ある種の遂行的な力をもった行為だということも述べている。そのように翻訳というものを捉え直すべきだろう。

●翻訳文学としての日本語文学

リービ英雄の『千々にくだけで』では、言語や、メディア、地理的な状況・空間、国や血縁、あるいは記憶といったものにおいて、多くの乖離や、乖離したものの接触、接点、というものが描かれる。

自らの母語とそれ以外の言葉との間には、言葉の面のみでなく、メディア・空間・血縁・記憶といった面においても、当然距離や隔りがある。しかしそれらはただ乖離し続けるわけではない。主人公であるエドワードの職業は翻訳家という設定になっているが、彼は、事件の状態や、それを伝えるメディアの様子を、日本語に言い換えていくことで把握し、認識していく。つまり翻訳によって、ばらばらだったイメージを、出合わせたり、重ね合わせたりするのである。また、翻訳することによって、その言葉が別の文脈・意味を引き寄せてしまう、という事態にも着目すべきだろう。翻訳によって、見えなかった隔りや顕著に現れてしまうということもあるということだ。

二つの関係を、翻訳によって表象し直す、語り直す、置き直すことによって環境をいじりなおし、位置をずらす。こういったことを遂行するのが翻訳という行為といえよう。

日本語文学というのはそれとしられない翻訳文学である。つまりそれは、日本語文学がそのような関係の再規定・再構築を行っている、ということなのである。

●おわりに

最後に、これまでの議論を、私達たちの身近なところへ落とし込みながらまとめていく。

多和田葉子は「母語の外に出なくても、母語そのものの中に複数言語を作り出すことで、「外」とか「中」とか見えなくなることもある」と述べている。第二項で述べたこととも関連するのだが、例えば、方言といった言語の差違に着目することで、普段の生活の中で、当たり前のように考えている言葉を見直すことにつながるだろう。それは、日本語とは別の言語を学び、用いるというレベルとは異なる「母語の〈外〉に出る」試みであるかもしれない。

また、今日の話は単純に日本語文学の話として収めることはできないだろう。

例えば、教育の現場でも日本語の問題は浮上するのではないか。日本語を国語として教える、国語教育の現場においてこれまでの話は無関係でははいはずだ。ここでは、誰が母語の外に出られるのか、という問題に置き換えて考えても良いのかもしれない。つまり、母語の〈外〉に出る、といっても、それは誰もが平等に可能性を与えられていることといえるか。出るためには、何らかの資格や条件があるのではないか。それは社会や教育の問題と結びつくものではないか。誰もが十分に教育を受けられるわけではないではないか。そのように考えてみると、これまでの議論はもっと複雑になるだろう。

それは社会的な状況と文学というものを関係づけて考えなくてはならないときがあるのではないか、という問題も提示する。特別な一部の作家や詩人の問題ではなくて、私たちの社会が直面している、グローバリゼーションの話や移民の話と結び付けられたときに現れる問題であるとも考えられるのだ。

(広島大学大学院教育学研究科博士課程前期2年)